

シベ語の定動詞述語文の機能について
—動名詞・形動詞述語文との比較から—

児倉徳和

(On the Function of the Finite Verbal Predicates in Sibe Manchu:
In Contrast of Non-finite Verbal Predicates)

Norikazu KOGURA

(pp. 169-184)

Contribution to the Studies for Eurasian Languages series vol.15

『チュルク諸語における固有と外来に関する総合的調査研究』
Native and Loan in Turkic Languages

九州大学人文科学研究院言語学研究室 Department of Linguistics, Graduate School of
Kyushu University／ユーラシア言語研究コンソーシアム The Consortium for Studies of
Eurasian Languages

2009 March

ISBN 978-4-903875-18-7

シベ語の定動詞述語文の機能について

—動名詞・形動詞述語文との比較から—

児倉 徳和

東京大学

nkogura@yahoo.co.jp

0. 問題の所在

本稿の目的は、シベ語¹の諸述語形式の機能を明らかにすることにある。シベ語では、定動詞の他に形動詞（動詞が連体修飾をする時の形式）、動名詞（前述の形動詞に接辞-*ge* が付加され、「～すること」「～するもの」という意味の名詞になった形式）も単独で主節の述部にくることができるが、このような形動詞述語、動名詞述語の機能を、李樹蘭(1984)、李樹蘭ほか(1984,1986)は「親知口気」という面から見て、形動詞述語および動名詞述語²が「親知」³、定動詞が「非親知」⁴を表すとしている。この「親知口気」という概念は、「親知」が「直接経験」に、「非親知」が「間接経験」という証拠性の対立に相当すると考えられる。しかし、李(1984)や、李樹蘭ほか(1984,1986)の分析によれば、形動詞述語と動名詞述語

¹シベ語は満洲=ツングース諸語の一つで、主に中国・新疆ウイグル自治区で話されている。本発表で用いるデータは、発表者が2005年から2008年にかけて中国・新疆ウイグル自治区イーニン市にて行った現地調査により得たものである。コンサルタントはチャブチャルシボ自治県第3ニル出身の60歳代の男性である。この場を借りてお礼申し上げます。

本稿でのシベ語の表記は以下の音素表記を用いる：/a, e, i, o, u, p, b, t, d, k, g, q, G, f, v, s, x, h, š, c, j, r, l, m, n, ŋ, y, w/

略号：1: 1人称, 2: 2人称, 3: 3人称, SG: 単数, PL: 複数, NOM: 主格, GEN: 属格, DAT: 与位格, ACC: 対格, INST: 道具格, DIR: 方向格, ABL: 奪格, NMLZ: 名詞化, TOP: 主題, POSS: 所属, IMPF: 不完了, PFV: 完了, PROG: 進行, PART: 形動詞, CVB: 副動詞, COND: 条件, CAUS: 使役, PASS: 受動, NEG: 否定, EMPH: 談話的強調, ON: 序数詞, MP: モダリティ小辞, QP: 疑問小辞

² 李樹蘭(1984)、李樹蘭ほか(1984,1986)では「形動詞」「動名詞」といった用語は用いられていないが、筆者のいう形動詞、動名詞に形式的に対応するため、ここでも「形動詞」「動名詞」と呼んでおく。

³ 李樹蘭(1984:26)には、“帶有说话人对所发生的动作和行为是亲自目睹的，亲身经历过的，直接得知的口气。”とある。

⁴ 李樹蘭(1984:27)には、“帶有说话人对所发生的动作和行为不是或不强调是亲知，亲见或亲身经历，而是间接得知的口气。”とある。

は共に「親知」となり、両者を機能的に区別できない。そこで筆者は児倉(2007)において両者の機能的差異を以下のように主張した。

- ・動名詞系列(-xeŋe 系列, bixeŋe 系列)は聞き手の知らない、あるいは覚えていない事柄を表し、談話において前提となる事柄を表す。
- ・形動詞系列(-xee 系列, bixee 系列)は話し手と聞き手が共に知っている事柄を表し、確認の発話行為と結びついている。

この分析は、動名詞述語と形動詞述語を機能的に区別することが出来たものの、それでもなお、定動詞系列の機能を説明できていない。そこで本稿では、定動詞と他の述語形式の差異を、形動詞述語や動名詞述語と比較しつつ考察することにした。

1. 形動詞・動名詞について

冒頭で述べたように、シベ語では形動詞、動名詞が述語に立つことができるが、述語に立つ動詞の形式を形動詞、動名詞と呼ぶのは、それぞれ相応の用法を持つためである。まず、形動詞は名詞を修飾することができる。

- (1) juben-deri ji-xe nane
日本-ABL 来る-PFV.PART 人
「日本から来た人」
- (2) mese-i yave-mahe johun
我々-GEN 歩く-PROG.PART 道
「我々の歩いている道」
- (3) cimare jaqe je-re ba
明日 食事する-IMPF.PART 場所
「明日食事をする場所」

そして、動名詞であるが、動名詞は「動詞語幹—形動詞接辞—名詞化接辞ŋe」という形式で現れる。動名詞は直接格接辞をとることが出来る点で名詞的な性質を持つといえる。

- (4) tere juben-ci yave-xe-ŋe-ve sa-qu.
3SG 日本-DIR 去る-PFV.PART-NMLZ-ACC 知る-IMPF.NEG

「彼は(君が)日本に行ってしまったことを知らない」

このような特徴を踏まえ、本稿では述語に立つ形式についても「形動詞」、「動名詞」と分析することにする。

2. 平叙文における差異

本節では、まず平叙文の場合について定動詞述語文と他の述語形式を比較しつつ見る。

2.1 定動詞述語文と動名詞述語文の差異

定動詞述語と動名詞述語の最も顕著な差異は、動名詞述語で表される事態は発話現場では聞き手にとって観察が不可能であるということである。例えば以下の(5)のように、話し手と聞き手が同時に目撃した事態は動名詞述語を用いて述べることができない。

(5) (話し手と聞き手が一緒にテレビでバレーボールの試合を見ている状況で)

- a. jungodwi ete-xei.
中国隊 勝つ-PFV
- b. ?jungodwi ete-xe-ŋe.
中国隊 勝つ-PFV.PART-NMLZ
「中国チームが勝った」

また、以下の(6)のように、完了アスペクトの定動詞述語は、発話時に結果状態が残存している場合も、残存していない場合にも共に用いられるが、動名詞述語は結果状態が残存している場合には用いられない。(6)では定動詞述語が発話時においてテーブルの上に本が置いたままになっている場合も置いていない場合も共に可能であるのに対し、動名詞述語は結果状態が残存している場合には使うことが出来ない。

- (6) a. dere-de bitkee senda-hei.
テーブル-DAT 本 置く-PFV
- b. dere-de bitkee senda-he-ŋe.

テーブル-DAT 本 置く-PFV.PART-NMLZ
「テーブルの上に本を置いた」

状態性の高い述語(名詞述語, 形容詞述語)は補助動詞 *bi* が変化することで動名詞述語を形成するが, この場合も, 以下の(7)のように発話時とは異なる状態であって, 観察できないということ((7)ではグルジャのスイカが発話時において甘くないこと)が含意される.

- (7) Gulja-i duja daciai amtige bi-xe-ŋe.
グルジャ-GEN スイカ 昔 甘い ある-PFV.PART-NMLZ
「グルジャのスイカは昔は甘かった(現在は甘くない)」

また, 動名詞述語が過去の事柄を表すのは, 聞き手の知らない事柄を表す場合に限られ, 特に話し手が自分の体験について述べる際に動名詞述語が好まれる.

- (8) bi min gucu-maqe gwanse-de jaqe je-me
1SG 1SG.GEN 友人-INST 食堂-DAT 食事する-CVB
ila-hee min gucu nane-maqe
立つ-PFV.PART.EMPH 1SG.GEN 友人 人-INST
bucunu-xe bi-xe-ŋe.
けんかする-PFV.PART ある-PFV.PART-NMLZ
「私が友人と食堂で食事をしていたら, 友人が人とけんかした」

反対に, 誰にでも知られているような事実を述べる際には, 動名詞述語が用いられず, 専ら定動詞述語が用いられる.

- (9) juŋxa nyalme irgen goŋxego eme minjan uyin taqe
中華 人 民 共和国 一 千 九 百
dixeuŋi-ci ani-de ili-ve-xei.
四十九-ON 年-DAT 建てる-PASS-PFV
「中華人民共和国は 1949 年に建国された」

2.2 定動詞述語文と形動詞述語文の差異

次に定動詞述語文と形動詞述語文の差異を見ることにする。形動詞述語文は聞き手が発話現場において観察可能であるか、または既に知っている(と話し手が推定している)事態に対してのみ用いられる。典型的には、以下の(10a)のように聞き手に促されて事態を確認する場合に用いられる。

(10) (聞き手が食事を終えたのを確認して)

- a. oo, si je-me vaje-xee.
 ああ 2SG 食べる-CVB 終える-PFV.PART.EMPH
 「ああ、ちゃんと食べ終えたんだね」
- b. oo, si je-me vaje-xei.
 ああ 2SG 食べる-CVB 終える-PFV
 「君はもう食べ終わりましたよ」

(10b)のように定動詞述語で述べると、話し手が聞き手に属する事柄を一方的に断定することになるため、「これ以上食べてはいけない」という禁止の読みが生じる。

また、以下の例からも、話し手と聞き手の双方にとって直接経験が可能な事態に対してのみ形動詞述語が用いられるということが分かる。

(11) (話し手と聞き手はポーカーをしており、互いの手札を見ることができない。話し手は山札からカードを引いてから相手に向かって)

- a. ?syān pai ji-xee.
 良い カード 来る -PFV.PART.EMPH
- b. syān pai ji-xei.
 良い カード 来る -PFV
 「いいカードが来た」

また、補助動詞 bi が形動詞となる場合は発話時以前に生起した事柄を表すが、この事柄は聞き手が知っている(と話し手が推定している)ものであるといえる。これに対し補助動詞 bi が定動詞である場合は聞き手が知っているかどうかを話し手は特に推定していない。具体的に述べると、以下の(12)において、形動詞述語の(12a)は、話し手が言ったはずのことを聞き手が忘れていて、という状況で用いられ、動名詞述語の(12b)は、話し手自身が言ったことを忘れていて、という状況で用いられる。

- (12) a. bi gisere-xe bi-xee.
 1SG 言う-PFV.PART ある-PFV.PART.EMPH
 「私は言わなかったか？(言ったはずだ)」
- b. bi gisere-xe bi-xei.
 1SG 言う-PFV.PART ある-PFV
 「私は言ったんだっけ？」

最後に、動名詞述語と形動詞述語を比較して見ることにする。既に述べたように、過去のことについて述べる場合、動名詞述語では、話し手は、聞き手が知らないと推定しているのに対し、形動詞述語では聞き手も知っているかと推定しており、両者はこの点で対照的である。

- (13) a. bi daci aji=taciqu-de seve dangle-he
 1SG 昔 小=学校-DAT 教師 担当する-PFV.PART
 bi-xe-ŋe,
 ある-PFV.PART-NMLZ
 ?si sa-mi baa. / si sa-qu baa.
 2SG 知る-IMPF MP / 2SG 知る-IMPF.NEG MP
 「私は昔小学校で教師をしていた。？お前知っているだろう／お前知らないだろう」
- b. bi daci aji=taciqu-de seve dangle-he
 1SG 昔 小=学校-DAT 教師 担当する-PFV.PART
 bi-xee,
 ある-PFV.PART.EMPH
 si sa-mi baa. / ?si sa-qu baa.
 2SG 知る-IMPF MP / 2SG 知る-IMPF.NEG MP
 「私は昔小学校で教師をしていた。お前知っているだろう／？お前知らないだろう」

3. 疑問文における差異

次に疑問文での差異を見ることにする。以下では疑問詞疑問文と真偽疑問文に分けて見る。

3.1 疑問詞疑問文

ここでいう「疑問詞疑問文」は、疑問詞を伴い、文末に強勢⁵がかかっているものとする。以下に例を挙げる。

- (14) si ceksee ai are-heii.
 2SG 昨日 なに する-PFV.EMPH
 「あなたは昨日何をしましたか？」

ここで注意しておきたいのは、(14)は形式的には疑問文とすることができるものの、意味上は典型的な疑問を表さない場合があるということである。つまり、(14)は、話し手が疑問文で表される事柄を知らずに聞き手に尋ねる場合だけでなく、疑問文で表される事柄を知っていながら聞き手に確認したり、あるいは非難するために用いられることがある、ということである。この両者を区別して見ると、定動詞述語と動名詞述語は疑問詞疑問文の可能な読みが異なるということが分かる。

- (15) a. si ineŋe ai je-ke-ŋee.
 2SG 昼 何 食べる-PFV.PART-NMLZ.EMPH
 「お前昼に何を食べたんだ？」
 b. si ineŋe ai je-keii.
 2SG 昼 何 食べる-PFV.EMPH
 「お前昼に何を食べたんだ？(あんなに食べたのだから夕食は要らないだろう)」

(15)において、動名詞述語である(15a)は、話し手は聞き手が何を食べたか知らない状況下でのみ用いられるのに対し、定動詞述語である(15b)は話し手が、聞き手が昼食に何を食べたか予め知っている状況下でも用いられうる。そしてこの時、何らかの疑問以外の含意を持つことになり、(15b)は例えば「あんなに食べたのだから夕食は要らないだろう」などといった含意を持つ。述語が進行アスペクトの場合も同様のことがいえる。

- (16) a. ai are-mahe-ŋee.

⁵ ここでいう強勢とは、arexei と arexeii のように、語末の母音の音価が変わることを指す。

何 する-PROG.PART-NMLZ.EMPH

「何をしているのか？」

b. ai are-maheii.

何 する-PROG.EMPH

「何をしているのか？(そんなこととしてはいけない)」

(16)において動名詞述語と定動詞述語の差異は2つの面に現れている。まず、動名詞述語である(16a)は発話現場の状況からは直接知ることができないような聞き手の職業などの属性を尋ねる場合に用いられるのに対し、定動詞述語である(16b)は専ら発話現場において聞き手が行なっている行為について尋ねる文である、ということである。

そしてもう一つの差異は完了アスペクトの場合と同様、定動詞述語のみ、話し手が予め聞き手が何をしているか(この場合は発話現場で行なわれている行為と、話し手の属性の両方の場合が有りうる)を知っている場合に用いることができ、例えば「そんなことはすべきではない」といった含意を持ちうる、ということである。

これら2つの差異は、以下のようにまとめることが可能だろう。つまり、進行アスペクトで表される事態は、発話時において進行中であることが多く、この場合話し手は発話現場の状況を観察することにより、どのような事態が進行中であるかということを知ることが可能である。動名詞述語で表される事態は話し手が知らない事態であり、そのような事態は多くの場合発話現場の状況からは知ることのできない、聞き手の属性などに限定される、ということである。

このことから、進行アスペクトの場合にも、完了アスペクトの場合と同様に、話し手が、どのような事態が進行中であるのか予め知っている場合にのみ定動詞述語が用いられるといえる。

未完了アスペクトは、完了や進行アスペクトの場合とは異なり、未完了形動詞と動名詞は述語に立つことがない⁶。

次に、述語に補助動詞 *bi* が現れる場合を見たい。以下の(17)で定動詞述語と動名詞述語を比較すると、動名詞述語(17a)は補助動詞 *bi* のない場合と同様、純粹に話し手の知らないことを聞き手に尋ねる場合に用いられるが、定動詞述語の(17b)の場合は必ずしも聞き手の存在を必要とせず、話し手が独り言の形で疑念を表出することがある。

⁶ 以下のような定型表現には現れることがあるが、生産的ではないため、本稿の議論からは除外しておく。

tere cimare ji-mi se-re.

3SG 明日 来る-IMPF 言う-IMPF.PART 「彼は明日来るそうだ」

(17) (家に帰ると玄関に他人の靴が置いてある)

- a. ve ji-xe bi-xe-gee.
 誰 来る-PFV.PART ある-PFV.PART-NMLZ.EMPH
 「誰が来たのか？」
- b. ve ji-xe bi-xeii.
 誰 来る-PFV.PART ある-PFV.EMPH
 「一体誰が来たのだろうか？」

次に形動詞述語を動名詞述語と比較すると、形動詞述語文の場合は、疑問文で表される事柄を話し手、聞き手の双方が既に知っているといえる。例えば以下の(18)において、形動詞述語は、話し手が思い出せない名前を知っている(はずの)聞き手に確認するために用いられている。

(18) tere-i geve-ve ai se-me bi-xe-gee.
 彼-GEN 名前-ACC 何 言う-CVB いる-PFV.PART-NMLZ.EMPH
 「彼の名前は何と言うのか」

(19) tere-i geve-ve ai se-me bi-xee
 彼-GEN 名前-ACC 何 言う-CVB いる-PFV.PART.EMPH
 「彼の名前、何て言ったっけ」

本節で見たことをまとめると、動名詞疑問文と形動詞疑問文が用いられる場合には、話し手は答えを予め知っていることが無いのに対して、定動詞が用いられる場合には、話し手は答えを予め知っていたり、独り言で用いられるなど、必ずしも聞き手から何らかの情報を引き出すわけではない、ということが言える。

3.2 真偽疑問文

次に、真偽疑問文についても見ておきたい。ここで真偽疑問文は文末に助詞 *na* をとる文であるとしておく。真偽疑問文にも二通りの読みがありうる。即ち一つは話し手が知らない事柄について尋ねる純粋な疑問であり、もう一つは話し手が知っている事柄について確認するものである。以下の例(20)は全て定動詞述語の文であるが、(20a)は、話し手が知らない事柄について尋ねる場合についてのみ用いることができるのに対し、(20b,c)は話し手が知っている事柄について確認する場合にも用いることができる。

- (20) a. si taciqu-de gene-xei na.
 2SG 学校-DAT 行く-PFV QP
 「お前は学校へ行ったか？」
- b. si taciqu-de gene-xaqui na.
 2SG 学校-DAT 行く-PFV.NEG QP
 「お前は学校へ行かなかったか？／行かなかったのか？」
- c. si taciqu-de gene-xe bi-xei na.
 2SG 学校-DAT 行く-PFV.PART ある-PFV QP
 「お前は学校へ行ったのか？」

真偽疑問文は動名詞述語と形動詞述語の場合も可能であるが、動名詞述語の場合は話し手が知らなかったことを確認する場合に用いられ(21)、形動詞述語の場合は話し手が知っていることを確認する場合に用いられる(22)。

- (21) si taciqu-de gene-xe-ŋe na.
 2SG 学校-DAT 行く-PFV.PART-NMLZ QP
 「お前は学校へ行ったのか？」
- (22) muse taciqu-de gene-xee na.
 1PL.INCL 学校-DAT 行く-PFV.PART.EMPH QP
 「我々は学校へ行ったよな？」

4. 談話における分布

ここまでは平叙文と疑問文に分けて定動詞と形動詞・動名詞の差異を見てきた。そしてその結果として、以下のことが分かった。

- (1) 平叙文を見ると、動名詞述語文は話し手のみ知っており、聞き手が知らない命題を述べる際に用いられ、形動詞述語文は話し手と聞き手の両方が知っている命題を述べる際に用いられる。
- (2) 疑問文を見ると、動名詞述語が、純粹に話し手の知らない命題について聞き手から何らかの情報を引き出すのに対し、形動詞述語文は話し手と聞き手の双方が知っている命題を確認するために用いられ、定動詞述語文は予め知っている命題をあえて疑問文の形で聞き手に伝えることで非難を表したり、独り言として疑念を表出するのみである場合もあり、聞き手から何ら

かの情報を引き出すために用いられていない。

ここで平叙文と疑問文に現れる各述語形式の特徴を見ると、動名詞述語は話し手と聞き手のどちらか一方のみ知っており、他方は知らない、あるいは直接経験が不可能な命題を表すのに用いられるのに対し、形動詞述語は話し手と聞き手の双方が知っている、あるいは直接経験が可能な命題を表すのに用いられる、というようにある程度一貫した特徴が見られるが、定動詞述語の場合は、疑問文に見られるような特徴が平叙文にも見られるか、はっきりしない。

そこで本節では、更に談話資料を用いて、これらの述語形式の機能を考察したい。ここでは、民話（フィクション）、体験談（話し手が自身の最近の経験について聞き手に話したもの）、回想（話し手が昔の自身の生活について語ったもの）という 3 つのジャンルのテキストにおける各述語形式の出現を観察する。これら 3 篇のテキスト中の述語形式の頻度は以下のものであった。

	民話	回想	体験談
定動詞	92(89.3%)	84 (73.0%)	53 (42.4%)
動名詞	8 (6.5%)	10 (8.7%)	22 (17.6%)
形動詞	4 (3.3%)	5 (4.3%)	39 (31.2%)
その他	19 (15.4%)	16 (13.9%)	11 (8.8%)
計	123	115	125

表: 談話のジャンルごとに見た各述語形式の割合

以下、ジャンルごとに具体例を見ていく。

4.1 民話

まず民話のテキストから見る。本稿では民話の特徴として、話し手（あるいは語り手）が、自身が関わらない出来事について語ったものと考え、フィクションであるかどうかは考えない。テキスト中の用例は大多数が定動詞述語のものであった。(23)がその例である。

- (23) ohui ohui tuttu o-ci, bi sinde gya-me
 いいよ いいよ そうなる-COND 1SG 2SG.DAT 取る-CVB
 bu-kii se-me daa moo sace-re nane
 やる-OPT.EMPH 言う-CVB そして 木 切る-IMP.F.PART 人

alin-de tavenne-me gene-maqe daa toroo
 山-LOC 登る-CVB 行く-CVB そして 桃
 emken tate-me gya-he bi-xei.
 一つ 摘む-CVB 取る-PFV.PART ある-PFV
 「『分かった、分かった。それなら（桃を）取って来てあげよ
 う』といって木こりは山に登って桃を一つもいで来た。」

4.2 体験談

ここでは、体験談というジャンルを、話し手が自分のことについて語るようなジャンルとして定義する。動名詞述語は話し手が自分のことについて語る際に好まれると述べたが、体験談では、動名詞述語が多用されることが予想される。実際動名詞述語の頻度は民話のテキストに比べ高いが、更に注目すべきは、定動詞述語の頻度の違いである。民話のテキストでは 89.3% が定動詞述語であったのに対し、体験談のテキストでは 42.4% と、割合にして半分以下である。(24) がその例である。

- (24) ere onole gene-xe-de tyananmen tere conlow-de
 これ 前 行く-PFV.PART-DAT 天安門 その 城楼-DAT
 tavenne-xaqu bi-xe-ge.
 登る-PFV.PART.NEG ある-PFV.PART-NMLZ.
 「これ以前に行ったときは天安門の楼に登らなかった」

4.3 回想

最後に回想のテキストを見る。ここでは、話し手が幼少時代(およそ 50 年前)の生活について語ったテキストを見たい。ここで回想と呼ぶジャンルは、話し手自身の体験談でありながら、昔の出来事を回想して語る、というものであり、民話と体験談の中間に当たるジャンルである。このような性質は、定動詞述語の割合が 73.0% と、先にあげた 2 つのジャンルの中間であることから窺うことができる。

- (25) efse-me waje-me ji-mee sade-me daa teba-de
 泳ぐ-CVB 終わる-CVB 来る-CVB.EMPH 疲れる-CVB と そこ-DAT
 yoxorun bi. ere yoxorun-de nimha Gohole-mii.
 小川 ある この 小川-DAT 魚 釣る-IMP.EMPH

次に、形動詞述語と動名詞述語の用例を見ると、興味深い事実が分かる。テキスト中を語る際、話し手は聞き手に話しかけることがあるが、形動詞述語と動名詞述語の用例は、聞き手に対して話しかける発話、及びその直後に現れることが多い。

- (26) ... ivi-me ji-mee simmaqe unqane-mee
 (人名) 遊ぶ-CVB 来る-CVB.EMPH 2SG.INST 逃げる-CVB.EMPH
 si baise seme ivi-me bi-xee. tukmedaa
 2SG 追う と 遊ぶ-CVB ある-PFV.PART.EMPH それで
 boo-ni o-me daa tyurxu-de teraŋe unqane-me,
 1SG.EXCL-POSS なる-CVB と 外-DAT そのように 逃げる-CVB,
 unqane-me jave-me ji-me daa bai-me
 逃げる-CVB, 捕える-CVB, 来る-CVB と 追う-CVB
 teraŋe ivi-me bi-xe-ŋe. ajige erin-de.
 そのように 遊ぶ-CVB ある-PFV.PART-NMLZ 幼い 時-DAT
 「…が来た時に、お前と、逃げて捕まえろって、遊んでいたじゃないか。
 我々は外でそうやって逃げて、捕まえに行って追いかける、というように
 遊んでいたのだ。子供の頃に」

- (27) sasqu taqu-mi na. oi sasqu feyi-ve gene-me
 カササギ 分かる-IMPF QP FIL カササギ 巣 行く-CVB
 qucile-me ekeme ta-me bi-xe-ŋe.
 ほじる-CVB こうして 見る-CVB ある-PFV.PART-NMLZ
 「カササギって分かるか？こうしてカササギの巣をほじって見ていたの
 だ」

このように、談話中に現れる動名詞述語や形動詞述語の例を見ると、多くは語りを一旦離れて、聞き手に何かを尋ねたり、確認している発話、およびその直後であり、語りであるか、聞き手との対話であるか、という違いが動名詞述語と形動詞述語の使用に関わっていると見る事が可能だと考えられる⁷。

⁷ これは Hopper and Thompson (1980) の foreground/background とも関連すると思われる。Hopper and Thompson (1980) によれば、動的(dinamic)な述語は foreground に置かれ、静的(static)な述語は background に置かれるという。シベ語の動名詞述語を名詞述語文の一種と見るならばまさにこの傾向に合致することになり、大変興味深い。

また、このように考えると、本節で見てきたようなジャンルごとの定動詞述語の頻度の違いも説明が可能である。つまり、民話は、典型的には聞き手の知識を考慮せずに語られるものであるのに対して、話し手が自分のことについて語る体験談は、典型的には聞き手の知識を考慮して語られるものである。一つの談話は両方の成分を含むが、より語りの性格が強くなるにつれ定動詞述語の割合が増える、ということである。

定動詞述語が聞き手の知識を考慮しない、ということは疑問文の観察からも支持される。つまり(17b)のような定動詞の疑問文が独り言として発話しうるのも、定動詞述語が聞き手の知識を考慮する必要が無いからであり、話し手が既知っているにもかかわらず聞き手に対して定動詞の疑問文を発することができるのも、定動詞述語が聞き手の知識を考慮していないからだと説明できるからである。

最後に平叙文についてみると、形動詞述語や動名詞述語が用いられるのは、話し手と聞き手の知識状態の違いが問題になる場合であるが、発話現場において生じた事態や一般的な常識については話し手と聞き手の知識状態の差異を問題にしにくいために定動詞述語が用いられると考えられる。

5. まとめ

本稿での議論は以下のようにまとめることが出来る。

- ・ 定動詞述語は聞き手の持っている情報や知識を考慮しない状況で用いられる。具体的には、聞き手のいない状況(独り言)や、聞き手に対して一方的に何らかの語りを行なう場合(民話)、また話し手の知らない情報を得るためではなく疑問文を用いる場合(反語)などに用いられる。
- ・ 動名詞述語と形動詞述語は定動詞述語とは逆に聞き手の持っている情報や知識を考慮する状況で用いられる。動名詞述語が用いられるのは、話し手が、聞き手が知らないと推定する知識に、聞き手に情報を与えるために言及する場合であり、形動詞述語が用いられるのは、話し手が、聞き手も知っているはずだと推定する知識に、聞き手に確認をするために言及する場合である。

本稿では、定動詞述語・動名詞述語・形動詞述語の機能を扱ったが、動名詞述語や形動詞述語はシベ語にのみ見られる現象ではなく、中国語の“是…的”構文や日本語の“のだ”文など、述語に類似の構造が現れる言語は多く見られる。

今後は他言語の現象も視野に入れて動名詞や形動詞の機能についてさらに考察を深めたい。

参考文献

- 李樹蘭. 1984. 「錫伯語動詞陳述式的親知口気和非親知口気」 『民族語文』 6:26-32.
- 李樹蘭, 仲謙, 王慶豊. 1984. 『錫伯語口語研究』 北京: 民族出版社.
- 李樹蘭, 仲謙. 1986. 『錫伯語簡志』 北京: 民族出版社.
- 児倉徳和. 2008. 「シベ語の述語形式と情報のステータス—話し手と聞き手の共有知識の観点から—」 寺村政男・久保智之・福盛貴弘 (編) 『言語の研究—ユーラシア諸言語からの視座—』. 大東文化大学語学教育研究所.
- Hopper, P. J. and Thompson. S. 1980. Transitivity in grammar and discourse. *Language*. 56:251-299.
- Mushin, I. 2000. Evidentiality and deixis in narrative retelling. *Journal of Pragmatics* 32:927-957.
- 2001. *Evidentiality and epistemological stance: narrative retelling*. John Benjamins; Amsterdam; Philadelphia.

**On the function of finite verbal predicates in Sibe Manchu:
in contrast of non-finite verbal predicates**

Norikazu Kogura
The University of Tokyo

Sibe Manchu has three kinds of verbal predicates: finite predicates, nominal-verbal predicates and participle predicates. The function of these predicates has been argued in terms of its evidential nature. For example, Li-Shulan(1984) argues that both nominal-verbal predicates and participle predicates express firsthand knowledge. However, it is clear that the contrast between nominal-verbal predicates and participle predicates cannot be sufficiently explained by its evidential nature. This present paper aims at explaining the functional contrast of these three kinds of predicates. Their use in declarative sentences, interrogative sentences and three pieces of discourse (folklore, reminisce about the childhood of the speaker, and about actual experiences of the speaker) are considered, and our conclusion is that finite predicate is not sensitive to the state of knowledge of interlocutor, whereas non-finite verbal predicates are sensitive whether he is mentioning about a shared knowledge among the interlocutors or not.